

## 2023 年度上野千鶴子基金助成金最終報告書

|           |                                  |
|-----------|----------------------------------|
| 1. 助成対象事業 | 女性学・ジェンダー研究の発展に資する調査、研究、出版       |
| 2. 事業の区分  | Seeds プロジェクト                     |
| 3. 氏名/団体名 | 池松玲子                             |
| 4. 事業名    | 「母親大会」の解明——戦後日本社会における女性の社会運動の再検討 |
| 5. 助成額    | 200,000 円                        |
| 6. 事業実施期間 | 2023 年 9 月 1 日～2025 年 8 月 31 日   |

### 7. 事業の目的

1954 年から現在まで継続する「母親大会」は、女性学・ジェンダー研究分野において十分に検討されてきたとはいえない。本研究は「母親大会」を女性たちによる戦後の重要な社会運動のひとつと位置づけ、歴史資料ならびに参与観察・インタビュー調査データの分析を通じて、その社会的意義を明らかにし運動の再評価を試みるものである。

### 8. 実施内容

#### ①資料収集

##### 主な収集資料

日本母親大会連絡会・実行委員会発行資料、東京母親大会連絡会・実行委員会発行資料、立教大学共生社会研究センター所蔵資料、東京ウィメンズプラザ図書資料室所蔵地域資料、国立女性教育会館所蔵 1970 年-2025 年間の母親大会関連新聞記事、母親大会参加団体発行資料、地域活動女性団体発行資料等。

#### ②参与観察

##### 参加母親大会

第 64 回川崎母親大会（2023 年 9 月 30 日）、第 68 回日本母親大会（2023 年 11 月 25-26 日）、2023 年東京母親大会（2023 年 12 月 16 日）、2024 年東京母親大会（2024 年 12 月 14 日）、第 68 回神奈川県母親大会（2025 年 3 月 16 日）、第 66 回川崎母親大会（2025 年 5 月 24 日）

#### ③インタビュー調査

##### 調査期間 2024 年 10 月～2025 年 8 月

インタビュー調査（協力者 10 名）、グループインタビュー調査 2 回（協力者各 5 名）

#### ④学会誌への投稿

#### ⑤学会大会での個人発表

### 9. 事業の成果と自己評価

日本母親大会は、この名称で毎年開催される大規模集会を指すと同時に、多様な社会問題に取り組む全国規模の運動体の総称ともいえる。全国レベルの日本母親大会の他に都道府県レベルや市区レベルの大会も存在することから、本研究ではこれらの総称として「母親大会」と呼ぶ。まずは資料収集から着手し、調査は大会参加による参与観察から開始した。資料収集は日本母親大会連絡会に併設された「川崎なつ

記念・母親運動資料室」所蔵資料から国立女性教育会館所蔵の母親大会関連新聞記事まで幅広く実施し、参与観察としては日本母親大会（山口市）、東京母親大会、神奈川県母親大会、川崎母親大会等、各レベルの複数の母親大会に参加した。

管見の限りで、日本母親大会発足から現在までを通じた運動全体を対象とする研究は見当たらない。そこでまず大会誕生の背景と経緯、組織、規模、参加団体、運営理念などについて、上記日本母親大会連絡会・各年実行委員会発行資料（1959-2022 年）のドキュメント分析を実施し、母親大会を総体的に把握した。その結果を集約し文書化したものが提出成果物①である。

上記資料は日本母親大会全体像把握に資する一次資料だが、この運動が実際にどう展開し、どのような結果をもたらしてきたのかを理解するには、さらに具体的活動内容を掘り下げる必要がある。そこで当該組織内資料で日本母親大会の「成功した運動」と自己評価された運動に着目し、その展開過程をメゾレベルである地域での活動において明らかにしようと試みた。具体的には「小児マヒ生ワクチン獲得運動」と「高校全入運動」の 2 例を取り上げ、母親大会に関わる地域活動団体の発行資料の分析と、実際に活動に参加した女性へのインタビュー調査を実施した。この結果を整理して学会発表を行い、その内容を成果物②として提出した。

上記 2 事例の活動展開過程が示すように、この運動には組織の中心的役割を担う女性だけでなく、地域の「一般の母親」も広く関与してきたという特徴がある。ではそうした地域で「実際に運動を担っている女性たち」の特徴を捉えたいと考え、機縁法により得られた 10 名の協力者にライフストーリー・インタビューを実施した。対象数は少なく、代表性を欠くものの、事例を通じて担い手像の一端を示すことはできた。

以上、当初の計画に沿って調査を実施し、母親大会の全体像（マクロレベル）や個別の運動展開過程（メゾレベル）、地域の個々の担い手女性たち（ミクロレベル）について一定の知見を得ることができた。一方で、収集した資料が膨大なため、現時点では分析が十分に進んでいないものもある。例えば、母親大会への外部の評価を検討するために収集したおよそ 50 年間の母親大会関連新聞記事や、日本母親大会有力参加団体に関する資料の分析には着手したばかりである。今後これらの分析に取り組み、最終的には母親大会の社会的意義を明らかにし、運動の再評価につなげることを目指したい。

## 10. 成果物

### ①国際ジェンダー学会誌第 22 号に掲載された「資料報告」の抜き刷り

タイトル：女性による社会運動としての「日本母親大会」—当該組織発行資料にもとづく概括的把握の試み

### ②国際ジェンダー学会 2024 年大会個人発表資料：配布資料、要旨、発表原稿

タイトル：地域における母親たちの運動実践—初期日本母親大会の「小児マヒ生ワクチン獲得」と「高校全入」運動の事例から